

所報

たまじむ

平成28年11月2日

第2号

東京都多摩教育事務所

東京都立川市錦町4-6-3

Tel 042-524-7222

Fax 042-528-0985

次年度の教育課程の編成に向けて — 次期学習指導要領の円滑な実施を視野に入れて —

東京都多摩教育事務所
指導課長 相原 雄 三

平成32年から平成42年頃までの子供たちの学びを支える役割を担う次期学習指導要領は、平成28年度末までに告示される予定で審議が進められています。

従来であれば、新しい学習指導要領が告示され、移行期間に入ってから、各教育委員会や各学校がその準備や体制づくりを行っていましたが、殊に次期学習指導要領への対応については、それでは遅いと言えます。

「特別の教科 道徳」は、小学校では平成30年度から、中学校では平成31年度から全面实施されます。それに伴い「考える道徳」「議論する道徳」へと指導方法の質的な改善を図るとともに、児童・生徒指導要録や通知表を改訂し、児童・生徒の学習状況等を適切に評価していく必要があります。また、小学校の英語教科化は平成32年度から全面实施されますが、その時に第4・5・6学年になる児童に対しては平成29年度から順次、適切に先行実施していくことが求められています。

さらに、次期学習指導要領において要となる、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した「アクティブ・ラーニング」の視点からの授業改善と学校の教育活動や組織運営の改善を図る「カリキュラム・マネジメント」は、重要な教育課題です。しかしながら文部科学省の「平成27年度公立小・中学校における教育課程の編成・実施状況調査」では、小・中学校ともに「アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善の取組の実施状況」は50%未満、「カリキュラム・マネジメントの確立に向けた取組の実施状況」に至っては40%未満という結果でした。

そのため各学校においては、これらの取組について次年度の教育課程においてできることから実践し、その実践を通して教員一人一人が改訂の趣旨や内容の理解を深めていくようにすることが大切です。

例えば、「カリキュラム・マネジメント」の確立に向けた取組については、まずは総合的な学習の時間の指導の改善・充実を通して、教員の力量を高めていくことを各学校が意識的・先行的に行っていく必要があると考えます。

総合的な学習の時間は、各学校が児童・生徒に育成したい資質・能力を設定し、「各教科等で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活に生かし、それらが総合的に働くようにすること」を軸にして、「地域の人々の協力」や「社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携」を図り、PDCAサイクルを展開していく学校の創意工夫を生かした指導の営みです。これはまさに「カリキュラム・マネジメント」の三つの側面（①教科等横断的な視点から教育内容を組織的に配列すること、②教育内容の質の向上に向けてPDCAサイクルを確立すること、③教育内容と教育活動に必要な人的・物的資源等を活用すること）に共通するものであり、総合的な学習の時間の指導そのものが、教員の「カリキュラム・マネジメント」の実践力を育むフィールドであると言えます。

「為すことによって、人は学ぶ」という言葉があります。これから次年度の教育課程を編成する時期を迎えます。次期学習指導要領の円滑な実施を視野に入れながら次年度の教育課程を編成し、その実践を通して教員一人一人の力量とその総体としての学校力を更に高めていくことを期待します。



◇ ◇ 目 次 ◇ ◇

【巻頭言】 次年度の教育課程の編成に向けて—次期学習指導要領の円滑な実施を視野に入れて—	1
【特集①】 学校教育目標の実現を目指すカリキュラム・マネジメントの推進	2～3
【特集②】 次期学習指導要領における外国語教育の方向性	4～5
【特集③】 「主体的・対話的で深い学び」の実現	6～7
【特集④】 オリンピック・パラリンピック教育・「よい、ドン!」の取組	8

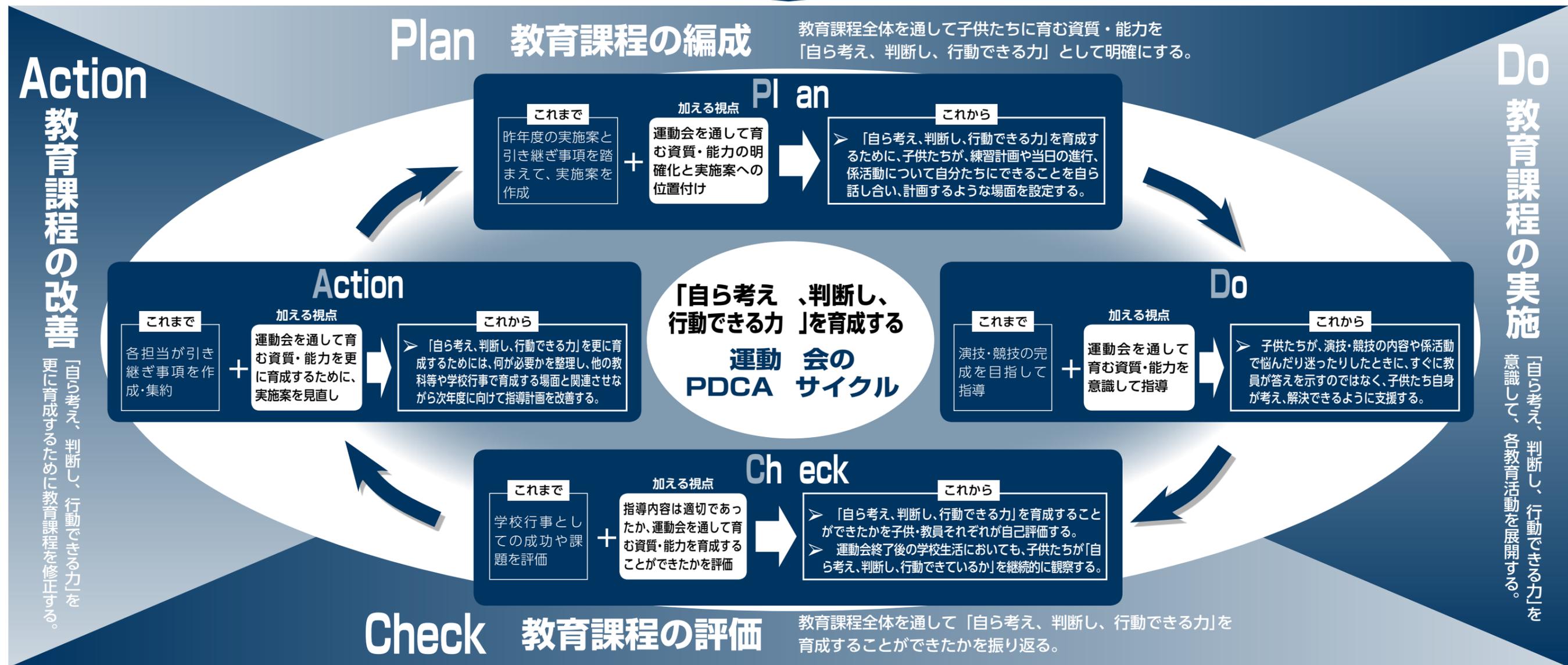
本号については、東京都多摩教育事務所のホームページからダウンロードできます。
ファイルの形式はPDFです。

<http://www.tamajimu.metro.tokyo.jp/>

学校教育目標の実現を目指すカリキュラム・マネジメントの推進

- ◆ カリキュラム・マネジメントとは、学校教育目標の実現を目指し、教育課程を編成(P)・実施(D)・評価(C)・改善(A)していく営みです。
- ◆ これまでのカリキュラム・マネジメントは、「教科等の教育活動の実施状況はどうだったか」に主眼が置かれ、「学校教育目標にある育みたい子供像を実現できたか」「育みたい資質・能力を育成できたか」という視点がやや弱かったという課題が見られます。
- ◆ そのため、今後は、これまでの取組に加えて、学校教育目標を踏まえて子供たちに育む資質・能力を具体化し、その実現に向けてカリキュラム・マネジメントを推進していくことが重要です。
- ◆ そこで、本特集では、学校行事の運動会を例にして、学校教育目標の実現を目指すカリキュラム・マネジメントの在り方について紹介します。

例) 学校教育目標:「自ら考え行動する人、心豊かな思いやりのある人、健やかでたくましい人」
 — 運動会を通して育む資質・能力を「自ら考え、判断し、行動できる力」にした場合 —



本特集の活用例 ○ 校内研修会資料 ○ 教科等研究会資料 ○ 校長会及び副校長会資料 ○ 各種主任会資料 など

今年度の多摩地区教育推進委員会報告会(平成29年2月16日(木)実施)では、本特集に関連した開発事例を発表します。

〔参考資料〕 ① 次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 平成28年8月26日) ② 初等教育資料(平成28年4月号)

次期学習指導要領における外国語教育の方向性

- ◆ 小学校の次期学習指導要領（平成32年度全面実施）では、小学校第3・4学年に外国語活動を位置付け、第5・6学年から外国語（英語）を実施する予定です。
- ◆ それに伴い、平成29年度から小学校第3学年に外国語活動を導入し、その子供たちが第5学年になる平成31年度から外国語（英語）を実施できるよう、適切に先行実施していくことが求められています。

- ◆ **小学校第3・4学年から聞くこと、話すことを中心とした外国語活動を通じて外国語の音声等に慣れ親しませながらコミュニケーション能力の素地を養った上で、第5・6学年から発達段階に応じて段階的に読むこと、書くことを加え、総合的・系統的に外国語教育を実施していきます。**
- ◆ 本特集では、今後の外国語教育の方向性とその実施に向けて多摩地区で取り組まれている実践を紹介します。

Question
平成32年度からの全面実施に向けて、なぜ今から先行実施していくことが求められているのでしょうか。

Answer
右の【段階表】に注目!!
平成32年度に第4・5・6学年が当該学年の内容を学ぶためには、平成29年度から段階的に先行実施していくことが求められます。

全面実施に向けた先行実施の【段階表】

平成29年度	平成30年度	平成31年度	平成32年度
第3学年（外国語活動）	第4学年（外国語活動） 第3学年（外国語活動）	第5学年（教科） 第4学年（外国語活動） 第3学年（外国語活動）	第6学年（教科） 第5学年（教科） 第4学年（外国語活動） 第3学年（外国語活動）

平成32年度に第5・6学年での外国語（英語）の学習を充実させるためには、当該の子供たちが第3・4学年のときに、適切な授業時数を設定して外国語活動の内容を学習しておくことが求められます。

なぜ、小学校第3・4学年から外国語活動が導入され、第5・6学年から教科学習が行われるのでしょうか。

右の【成果】に注目!!
小学校外国語活動のこれまでの取組から、コミュニケーション能力の素地を養う観点で、成果が出ています。一方、体系的な学習が行われていないため、子供が学習内容に物足りなさを感じている状況も見られます。

現行の学習指導要領における小学校外国語活動の【成果】

○ 小学生の7割が「英語が好き」「英語の授業が好き」と回答
○ 中学生の8割が「小学校の英語の授業（簡単な英会話）が役に立った」と回答
○ 多くの中学校教員が「小学校外国語活動の導入前と比べて、生徒による英語の【聞く力】【話す力】が向上した」と回答

一方で、
中学生の8割が「小学校の外国語活動で英単語を『読む』『書く』機会がほしかった」と回答
※ 中学校において音声から文字への移行が円滑に行われていなかった。
「平成26年度 小学校外国語活動実施状況調査（文部科学省）」から

小学校では、これまでの実践を踏まえ、第3・4学年から外国語活動を開始し、音声等に慣れ親しませながらコミュニケーション能力の素地を養います。第5・6学年では、身近で簡単なことについて外国語（英語）の基本的な表現に関わって聞くこと、話すことに加えて、積極的に読むこと、書くことに関わる態度の育成を含めたコミュニケーション能力の基礎を養います。そのため、学習の系統性をもたせる観点から、外国語教育を教科として行うことが適当であると考えています。

中学校の内容が小学校第5・6学年へ、小学校第5・6学年の内容が小学校第3・4学年へ前倒しされるのでしょうか。

右の【目標】に注目!!
小学校第3・4学年では、今までの取組を生かして、外国語（英語）の学習に対する動機付けを行うとともに、音声等を中心として体験的に理解を深めます。小学校第5・6学年では、積極的に外国語（英語）を読もうとしたり書こうとしたりする態度の育成を含めた初歩的な英語の運用能力を養います。

小学校第3・4学年 外国語活動の【目標】
各学校の特色ある取組において実施

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、相手意識をもってコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、**外国語の音声等に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。**

小学校第5・6学年 外国語（現行では活動）の【目標】
外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。

外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、相手意識をもってコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、**身近で簡単なことについて外国語の基本的な表現に関わって聞くことや話すことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。**

中学校 外国語の【目標】
外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、**聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う。**

外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、他者を尊重し、聞き手・読み手・話し手・書き手に配慮しながら、コミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図るとともに、**具体的な身近な話題についての理解や表現、簡単な情報交換ができるコミュニケーション能力を養う。**

小学校第5・6学年では、四技能の定着を目指すのでしょうか。

右の【目標イメージ】に注目!!
小学校第5・6学年における読むこと、書くことについては、定着させることに目標があるのではなく、興味を育てることを目指しています。

小学校第5・6学年の【目標イメージ】
「教育課程部会 外国語ワーキンググループ」では、第5・6学年の教科としての外国語（英語）の目標イメージを次のように示しています。

- (1) 身近で簡単なことについて話される初歩的な英語を聞いて、話し手の意向などを理解できるようにする。
- (2) 身近で簡単なことについて、初歩的な英語を用いて自分の考えなどを話すことができるようにする。
- (3) アルファベットや単語に慣れ親しみ、英語を読むことに対する興味を育てる。
- (4) アルファベットを書くことについて慣れ親しみ、英語を書くことに対する興味を育てる。

現行の中学校の外国語の目標が、「聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」ことであるのに対して、次期学習指導要領における小学校第5・6学年外国語（英語）の目標は、「聞くことや話すことなどのコミュニケーション能力の基礎を養う」となっています。また、左の【目標イメージ】のように、小学校第5・6学年外国語（英語）は、聞くこと、話すことについては定着を視野に入れ、読むこと、書くことについては慣れ親しむことを重視しています。

多摩地区で取り組まれている実践
多摩地区では、英語教育推進地域として7市の教育委員会及び学校が外国語教育の充実に向けた取組を行っています。また、東京都教育委員会では、小学校第3・4学年用の教材*1を配布します。本特集では、英語教育推進地域の取組から四つの事例を紹介します。

※1 東京都教育委員会では、小学校第3・4学年で使用できる教材を開発し、平成28年11月に電子データにて、配布を予定しています。内容は、「理論編」「第3・4学年の指導案（各35時間分）」「ピクチャーカード」です。

◆ 事例1（小学校全学年）
「外国語活動アドバイザー等によるALT活用事業」

『ALT活用事業』
外国語活動アドバイザー、英語コーディネーターがALTと連携を図り、子供が外国の人や文化に積極的に関われるよう、外国語活動の授業以外の教科等の学習や放課後の時間にもALTとコミュニケーションを図る活動を計画します。
(実践例)
○ 『ALTと遊ぼう』
放課後の時間に、複数のALTが学校を訪問し、一緒に歌やダンスをしたり、ゲームをしたりする活動を通して、英語でのコミュニケーションに慣れ親しませませす。
○ 『ALTと一日過ごす』
ALTが一日学校に滞在し、外国語活動の授業以外の教科等の学習や休み時間等においても一緒に過ごす活動を通して、学校生活の様々な場面で英語を活用する力を育てます。
(情報提供：羽村市教育委員会)

◆ 事例2（小学校第3・4学年）
「発達段階に応じた、英語に慣れ親しむ絵本の活用」

『絵本を活用した学習（玉川大学との連携事業）』（15分ユニットの一つ）
絵本の内容を捉えることだけでなく、ある一場面について子供から出てきた発言を基に対話したり、過去に学習した表現を使ったりして英語に慣れ親しみます。また、絵本に出てくる表現を生活の場面を想起して活用できるようにします。
(例) 「What a bad dog!」(Oxford reading tree)
【例えば、公園に4匹の犬がいる場面があった場合】
○ 子供から「犬がいる」という発言があった。
「Yes. There are dogs. How many dogs?」
その他にも「Where is this?」など場所を問う。など
○ 「What a ~!」の表現の学習
給食の献立を思い出させて、「What a nice school lunch!」など (情報提供：町田市教育委員会)

◆ 事例3（小学校第3・4・5・6学年）
「何ができるようになるかを明確にしたパフォーマンステスト」

『小学校パフォーマンステスト』
各学校段階の学びを円滑に接続させるため、東京都教育委員会が作成した「中学校英語・パフォーマンステスト」の内容との接続を意識した「小学校英語・パフォーマンステスト（試案）」を作成・試行しています。
(第5学年のテストの例)
○ 内容 自己紹介＆簡単なインタビュー
○ 形式 学級全体の前でのスピーチ及びその場での簡単なインタビュー
① “Hello, friends”などの挨拶から始まり、「Thank you」などのお礼で終わる。
② 自分の名前の紹介と、好きなもの(こと)、嫌いなもの(こと)に触れる。
③ 挨拶やお礼を含めて4文以上、できれば5文を目標とする。
○ その他、留意点や教員スクリプト、採点基準などをテストを実施する上でのポイントを詳細に示しています。
(情報提供：西東京市教育委員会)

◆ 事例4（小学校第5・6学年）
「読むこと、書くことに慣れ親しむ授業」

『効果的な指導を行うためのガイドライン』
一単位時間(45分)を主に三つの活動に分けて段階的に指導します。段階的に指導することで、児童の自己表現の活動が円滑につながり、授業に取り組みやすくしています。
○ 活動Ⅰ 英語の語彙や文法の音声に触れる活動(読むこと、書くことを取り入れた授業の例)
・ 中学校で学習する単語を前倒しするのではなく、身近な生活で使われる単語(食べ物、動物、色など)について文字指導(Writing)を行います。(小学校第3学年から)
・ 単語を覚えて書くということではなく(定着を目指すのではない)、読むこと、書くことに慣れ親しむ学習です。
○ 活動Ⅱ 会話の表現に慣れ親しむ活動 ○ 活動Ⅲ 自分の思いを伝える活動
※ 一単位時間の全てを読むこと、書くことに関する指導を行うのではなく、外国語（英語）に慣れ親しみながら学習していくようにします。
(情報提供：福生市教育委員会)

本特集の活用例 ○ 校内研修会 ○ 市町村教育委員会主催の研修会 など

〔参考資料〕① 今後の英語教育の改善・充実方策について 報告（文部科学省 平成26年9月） ② 初等教育資料（平成28年5月号） ③ 小学校英語の教科化に向けた東京都教育委員会の取組（平成28年7月）

「主体的・対話的で深い学び」の実現

本号の2・3ページでは、子供たちに育む資質・能力を明確にした「カリキュラム・マネジメント」の推進について特集しました。子供たちがこの資質・能力を身に付けていくためには、子供たちが「どのように学ぶか」という学びの質がとても重要になります。この学びの質は、主体的に学ぶことの意味と自分の人生や社会の在り方を結び付けたり、多様な人との対話で考えを

広げたり、各教科等で習得した概念（知識）や考え方を活用した「見方・考え方」を様々な課題の解決に生かして学びを深めたりすることによって高められます。本特集では、このような「主体的・対話的で深い学び」を実現するための子供の学びの在り方に着目した授業改善のポイントと指導の留意点について整理しました。

学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的(アクティブ)に学び続けるための

主体的・対話的で深い学び

学ぶことに興味や関心を持ち、自己の*キャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる

*キャリア形成…自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現していくこと

例) 学習のゴールを明確にもつ

外国語活動や外国語(英語)で学んだ英語表現を活用して、日本を訪れる外国人に道案内をしたり、東京のガイドブックを作ったりする。



例) 解決に向けた見通しをもつ

体育で、これまで学習した練習方法の中から何が活用できるかを考える。



例) 学習を振り返る

学習を通してどのような力が身に付いたかを振り返り、ノートに書く。単元・題材の途中では、自己の課題を明らかにして次の学びに生かす。

【授業改善のポイント】

- 単元・題材を通して興味をもって積極的に取り組むようにする。
- 学習活動を自ら振り返り、意味付けできるようにする。
- 身に付いた資質・能力を自覚したり共有したりする場面を設定する。

子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深めていく

例) 協働的な活動を通じて考えを広げ深める

総合的な学習の時間に、友達、先生、地域の人との対話を通して、様々な立場から「避難所運営計画」を作成する。

例) 複数の資料を基に多面的に考える
社会の歴史の学習で、複数生活や文化など多様な視点から一つの時代について理解を深める。



【授業改善のポイント】

- 相手と対話したり、資料を読み込んだりしながら多様な考え方に気付くようにする。
- 多様な表現を通じて子供同士が対話したり、子供が教職員や地域の人と対話したりして思考を広げ深めていくようにする。

各教科等で習得した概念(知識)や考え方を活用した*「見方・考え方」を働かせ、問いを見いだして解決したり、自己の考えを形成し表したり、思いを基に構想、創造したりすることに向かう

*「見方・考え方」…物事を捉える視点や考え方であり、次期学習指導要領では全ての教科等で整理される。

例) 「見方・考え方」を働かせて課題解決の手だてを考える

理科の「電気の利用」の単元で、別の単元で習得した「自然現象を比較したり、関連付けたりする」という「見方・考え方」を働かせて、電球の明るさについての予備実験を計画・実行し、自分の考えを整理して学習問題に対する仮説を立てる。



例) 多様な教科等の「見方・考え方」を働かせて問いを見だし解決する

総合的な学習の時間に、住んでいる町の様子を調べ、調べたことを基に「商店街を活性化させるためには、どのようにすればよいか」という問いをもち、解決策を構想し、まとめたアイデアを市長に向けて発信する。



【授業改善のポイント】

- 各教科等で習得した概念(知識)や考え方を実際に活用して、問題解決等に向けた探究を行う中で、資質・能力の三つの柱(「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」)に示す力を総合的に活用・発揮する場面を設定する。
- 教える場面と思考・判断・表現させる場面を効果的に設計し、関連させながら指導する。

「主体的・対話的で深い学び」を実現するための指導の留意点

留意点①

単元や題材のまとまりの中で、バランスよく三つの視点を満たす学びの実現

主体的・対話的で深い学び

三つの視点は、
◆ 一単位時間の中で全てが実現されるものではなく、**単元や題材のまとまりの中で実現**されます。
◆ 単元や題材のまとまりの中で、**バランスよく実現**される必要があります。

単元や題材

- ❖ 学習内容を深く理解する
- ❖ 資質・能力を身に付ける
- ❖ 能動的に学び続ける

留意点②

必要な学習環境の設定

- 必要な知識・技能は教授するとともに、子供たちの思考を深めるために発言を促したり、子供たちが気付いていない視点を提示したりする。
- 活動の目的や方法を明確にし、活動時間を十分に確保する。

留意点③

子供の実態に即した対応

- 基礎的・基本的な知識・技能の習得に課題が見られる場合には、それらを身に付けさせるために、**子供の学びを深めたり主体性を引き出したりといった工夫を重ねながら、確実な習得を図る。**
- 子供たちの状況を踏まえながら、**資質・能力を育成するために多様な学習活動を組み合わせる。**

本特集の活用例 ○ 週ごとの指導計画の作成 ○ 校内研修会 ○ 市町村教育委員会主催の研修会 など

【参考資料】

○ 次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会 平成28年8月26日)

オリンピック・パラリンピック教育・「よい、ドン！」の取組

- ◆ リオデジャネイロ2016オリンピック・パラリンピック競技大会が閉幕し、4年後の東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会に向けて、ますますオリンピック・パラリンピック教育を充実させる段階を迎えています。
- ◆ オリンピック・パラリンピック教育においては、各学校で様々な4×4の取組(4つのテーマ×4つのアクション)や4つのプロジェクト(東京ユースボランティア、スマイルプロジェクト、夢・未来プロジェクト、世界ともだちプロジェクト)を展開することにより、[5つの資質]を育むことが重要です。
- ◆ 本特集では、多摩地区の学校の子供たちに、この[5つの資質]を育むために創意工夫を凝らした教育実践を紹介します。

[5つの資質] ★ボランティアマインド ★障害者理解 ★スポーツ志向 ★日本人としての自覚と誇り ★豊かな国際感覚

ポイント 【これまで】の内容に「4×4の取組」を組み合わせたり、「4つのプロジェクト」を位置付けたりすることによって、オリンピック・パラリンピック教育を充実させることができます。

ボランティアマインド

総合的な学習の時間「校外学習」

【これまで】
地域のまつりにボランティアとして参加 + オリンピック・パラリンピック×学ぶの精神

4年後の東京オリンピック・パラリンピック競技大会を見据えて、おもてなしの心を持ち、地域のボランティア活動等に参加する。

東京2020大会で様々な方が訪れることを想定しながら、都内の施設を見学しました。感じたことや考えたことを振り返り、自分にできることについて考えを深めました。3年間の学びを通して、ボランティアマインドを育みます。



<実践校：西東京市立明保中学校>

障害者理解

特別活動「障害のある方との交流」

【これまで】
障害のある方から話を聞き、感想をまとめる + スポーツ×する

パラリンピアンのお話を聞いたり、特別支援学校の児童と一緒にパラリンピック競技を体験したりして障害のある方への理解を深める。

《夢・未来プロジェクト》としてパラリンピアンのお話に触れるだけではなく、《スマイルプロジェクト》として特別支援学校の児童と一緒にスポーツ「ボッチャ」を体験し、楽しみました。



<実践校：調布市立第一小学校>

スポーツ志向

特別活動「異学年交流」

【これまで】
一緒にスポーツを体験するなどの異学年交流 + スポーツ×する・学ぶ

オリンピック・パラリンピック競技について調べたことをグループごとに伝え合い、共に体験することで、スポーツへの関心を高める。

児童が調べたことを基に、オリンピック・パラリンピック種目の体験コーナーを設置しました。世界記録や日本記録、世界中の選手の写真が掲示された各コーナーで、児童は楽しみながら競技を体験しました。



<実践校：八王子市立横山第二小学校>

日本人としての自覚と誇り

総合的な学習の時間「日本の伝統文化体験」

【これまで】
調べたことを学習発表会で発表する + 文化×学ぶ・する

「オリンピック出場国」でもある姉妹都市の方たちに、日本の昔遊びを体験してもらったり、武道を実演して見せたりして、日本の文化を披露し交流する。

授業や学校行事「地域から学ぶ日」において、学習の成果を生かし、箏、書道、百人一首、折鶴、着付の各体験コーナーの企画・運営を生徒が行い、交流しました。使節団の方々からの感想を通して、日本人としての自覚と誇りを深めました。



<実践校：青梅市立第一中学校>

豊かな国際感覚

外国語活動「留学生との交流」

【これまで】
留学生から、自国の文化について話を聞く + 文化×学ぶ・する

「オリンピック出場国」の留学生から、自国の生活や文化等について学んだり、簡単な英語を使って会話をしたりして交流する。

《世界ともだちプロジェクト》として留学生と交流し、異なる文化に触れたり、知っている外国語を用いてコミュニケーションを楽しんだりしました。伝わることの嬉しさを味わい、「もっと交流したい」という気持ちが育まれました。



<実践校：武蔵村山市立第三小学校>

オリンピック・パラリンピック教育を充実させる授業づくりのポイント!!

- ① 子供に育む資質を明確にします。(何ができるようになるか)
- ② 資質を育むためのテーマ(何を学ぶか)、アクション(どのように学ぶか)を選び、計画します。
- ③ その際、学校全体の教育活動を見渡し、オリンピック・パラリンピックに関わる「ひと・もの・こと」と関連付けられそうな【これまで】の教育活動を明らかにして、①②の視点から改善・修正を行っていくことが大切です。



次号
予告

「たまじむ」第3号
平成29年2月28日発行予定

- 特集① 東京都多摩地区教育推進委員会の研究報告
- 特集② 学習指導要領の改訂に向けて
- 特集③ いじめ防止等の対策を推進するポイント
- 特集④ 多摩地区指導主事及び学校リーダー研修会報告

※ 特集については変更する場合がありますので、御了承ください。